

国立大運営費交付金の再配分

目標設定の妥当性評価

国立大への運営費交付金の再配分結果 ※文科省の資料を基に作成

重点的な 取り組み 配分率	地域貢献 (55大学)	強み・特色 (15大学)	世界水準 (16大学)
110%以上	福島、浜松医科、帯広畜産	東京医科歯科	
100%以上 110%未満	愛媛、三重、信州、新潟、北海道教育、秋田、山形、宇都宮、横浜国立、名古屋工業、滋賀医科、京都工芸繊維、大阪教育、徳島、高知、長崎、熊本、大分、宮崎、琉球、滋賀、弘前、岐阜、群馬、長岡技術科学	奈良先端科学技術、総合研究、東京外国語、東京芸術、筑波技術	京都、九州、東京工業、北海道、東京、金沢、東京農工
90%以上 100%未満	岩手、豊橋技術科学、愛知教育、鹿児島、鳥取、香川、福井、山梨、佐賀、和歌山、兵庫教育、茨城、山口、室蘭工業、小樽商科、北見工業、埼玉、上越教育、島根、鳴門教育、福岡教育、静岡	お茶の水女子、九州工業、電気通信、北陸先端科学技術、東京海洋、政策研究、東京学芸	大阪、東北、神戸、名古屋、筑波、岡山
80%以上 90%未満	旭川医科、宮城教育、京都教育、奈良教育、富山	奈良女子	広島、千葉、一橋
80%未満		鹿屋体育	

国立大学の教育・研究改革の取り組みを評価するため2016年度から導入された運営費交付金の一部を再配分する制度で、文科省は17年度の大学ごとの配分率を公表した。全86大学のうち41大学が増額、45大学が減額され、福島大など4大学が1割以上増える一方、一橋大など10大学は1割以上減らした。

再配分されるのは運営費交付金の全額の約1%にあたる約100億円。各大学は、①人材育成などで地域に貢献②強み・特色のある分野で教育・研究を推進③世界の大学と伍する卓越した教育・研究（世界水準）

から重点的な取り組みを一つ選び、目標・計画を提出しなければならない。

16年度は取り組みの構想が主に評価されたが、17年度は目標の達成度をチェックする指標の設定の明確さや妥当性などが評価の中心となった。

「地域貢献」で、最も高い配分率113.0%となったのは、福島大と浜松医科大。福島大は東日本大震災や原発事故の教訓を生かした人材育成を掲げ、「食と農業の課題に対応する高度な知識・技能を習得した人数」などの指標で高い評価を受けた。浜松医科大は光を使う最先端医学研究の実用化に向けた技術相談件数などの目標設定の評価が高かった。

貢献する研究拠点を狙い国際特許の出願件数を1.5倍にするなどの指標が適切とされた。一方、鹿屋体育大は全体でも最低の78.3%。2020年東京五輪・パラリンピックに向け、国際競技力向上の研究拠点を狙ったが目標設定などの評価が低かった。

また、「世界水準」では京都在最高の108.5%で、国際的に評価の高い学術雑誌への論文掲載の目標数などが高い評価を受けた。司法試験合格者の博士号取得者数を3倍に増やすとした一橋大は、必要性の説明が不十分とされ、最低の87.6%に減額された。

全体では、教員養成系の単科大の苦戦も目立った。11大学中9大学が減額。特に宮城教育、京都教育、奈良教育の3大学は82%台だった。

健康長寿社会に

■ 本気プロまもなく10年！ 成果発表会と座談会 (2017/01/18)

ツイート

小樽商科大学(緑3)が開講する正課科目・社会連携実践(担当:大津晶准教授)で、商大生が小樽の活性化を本気で考えるプロジェクト(通称マジプロ)の「本気プロ2016夏(昨年7月~12月)」の最終成果発表会が、1月18日(水)15:00から、同学3号館2階213AL講義室で開かれ、これまで履修した学生や新規履修学生、協力企業など80名が参加した。

第1部は本気プロ2016夏の3つのプロジェクトの発表があり、1つ目は「小樽ブランドを活かした新たな商品開発」で、小樽のほとんどの小学生が使用しているナップランドに注目し、小樽に根ざしたナップランドについて調査。



小学生限定カバンのイメージを変え、大人でも使える生活スタイルに合わせた新しいナップランドの開発に取り組んだ。ナップランド販売店のバックのアカシ、バックのムラタを行き来し、同店監修の新デザインカバン製作を岩内町の村本テントに依頼。試作品の完成は10月頃を予定していると発表した。

ナップランド使用世代の男性から「どんな年代をターゲットにしているのか？」と質問があり、「ナップランドを販売しているカバン屋さんにも買い物に来る人をターゲットにし、若者向けのデザインでも大人も使えるもの」と答えた。

また、このプロジェクトから学んだことは、「少子化に伴い、現実問題としてナップランドにも危機感を感じていること、通いつめるうちに本音を聞くことができた」と話した。



2つ目の「小樽観光のユニバーサルデザイン」は、店舗等のアンケート結果から、トイレの使用方法が分からない外国人観光客が多いことを知り、日本語・英語・中国語・台湾語・韓国語に対応した使用方法のシールをデザインし、A4サイズ120枚×4種類の1,440枚を製作。店舗で必要なシールを使用することで、トイレを綺麗に使用でき、小樽のおもてなしに繋がるとした。

最後の「市立図書館の活性化」は、図書館の利用者数が減少傾向にあり、本と実体験をプラスした地域に根ざしたコミュニティを目指し、12月におたる水族館と図書館が連携したイベント、1月にぐりとぐらの絵本を読み聞かせ、絵本に出てくるカステラを子ども達と作った。

参加者の中から、「なぜ本を買わずに図書館を利用しているのか、掘り下げることにより見えてくることがあったかもしれない。本が好きな人が集まる場所とあるが、本が好きな人ばかりでなくても良かったのでは？」と厳しい指摘があった。

鈴木館長は、「水族館と連携して新たな方向性を見つけた。今回はイベントなので、今後どう継続して、日常に繋げるかが課題となる」と話した。



第2部は、まもなく10年を迎える本気プロを今後につなげるための、同准教授や小山田健学術研究員による解説が行なわれ、参加者が5つのグループに分かれ、小樽・後志の活性化のために取り組んでほしいプロジェクトや取り組むべきプロジェクト、今後に望むことを各グループごとにまとめ発表した。

屋形船など地域の施設を活用して、国内外の観光客へ新しい小樽の魅力を発信するプロジェクト、観光をテーマに夜のツアー、トイレの場所や飲食店の営業時間を盛り込んだ観光マップを作り、外国語で書かれたメニューなどを製作するプロジェクトを提案し、地域との連携を深め課題を解決するためには、学生の人数を増やしマジプロを長期化させるよう望む意見があった。

最後に、すでに始まっている新プロジェクト(銭函の活性化他1つ)と、新履修生の紹介があった。